

聖書:第一列王記18章16~40節

説教:主よ。あなたこそ神です

はじめに

北王国の七代目の王となったアハブは、外国からイゼベルという女性を妻に迎えたとき、アハブは主を捨ててイゼベルが信じていたバアル神を拝むようになります。これをご覧になっていた神は、あるときアハブの所に預言者エリヤを遣わし、「私のことによるのでなければ、露も降りず、雨も降らない」と語らせました。それからおよそ三年半の間、エリヤが語ったとおり、雨がまったく降らず、イスラエルは大飢饉に襲われます。アハブとイゼベルは五穀豊穰の神バアルに雨乞いをしてもなんの効果もない。そうするとこう考えるわけです。「エリヤが呪いをかけてイスラエルにわざわいをもたらしたのだから、雨を降らせるためにはエリヤを殺さなければならない。」しかしどんなに探し回ってもエリヤは見つかりません。それでイゼベルはエリヤの身代わりとして主の預言者を殺してしまいます。

そんな大変な中であつた北王国でしたが、それでも主を信じる者たちが幾人かは残っていて、その中の一人がアハブの部下として仕えていた宮廷長官オバデヤと言う人でした。主の預言者を殺すようにとの命令が出たとき、アハブに隠れ、自分のいのちをかけて主の預言者をかくまいます。そんなオバデヤの苦しみを知ってくださった主は、エリヤをオバデヤの所に遣わし、イスラエルの信仰をもう一度建て直すために主が先頭に立って戦ってくださることを約束します。それが前回までのあらすじです。今日はその続きで、エリヤとバアルの預言者が直接対決をし、エリヤが築いた祭壇の上に主の火が降り、エリヤが大勝利を取める。そのような場面に見えますが、ここにどのような神の恵みがあるのかを見ていきます。

## 1 エリヤとバアルの預言者の戦い

### 1) 「どっちつかずによろめいているのか」

エリヤがバアルの預言者との戦いの場として選んだカルメル山には、三年前のイスラエル旅行のときに行ってきました。藻岩山ほどの高さがあり、40節に出て来るキシオン川も間近に見ることができました。

エリヤとバアルの預言者が、このカルメル山で対決をするという知らせは国中に瞬く間に知らされ、その光景を一目見ようと多くの人たちが集

まってきます。集まった人たちにエリヤはこう言います。21節。「おまえたちは、いつまで、どっちつかずによろめいているのか。もし主が神であれば、主に従い、もしバアルが神であれば、バアルに従え。」

このエリヤのことばから、ここに集まった人たちが、主を信じているのでもなく、バアルの神を信じているのでもないことをうかがい知ることができます。これは日本人の宗教観とよく似ている。元旦は神社に初詣をし、葬式は仏式、結婚式はキリスト教です。どれが本物の神であるのかということは考えません。エリヤに言わせれば「どっちつかずによろめいている」状態でしょう。それでエリヤは問いかけたわけです。でも民たちは答えません。なぜなら、自分にとって都合の良い神を、場面にあわせて使いわけたほうが便利だと思っているから。でも本当にそれでいいのか。エリヤは、どの神が本当の神であるかを人々の前で示そうと孤軍奮闘していきます。

## 2) 水を注ぐ

まずバアルの預言者たちが、雄牛を切り裂き、それを薪の上に載せ、その周りでバアルの名前を叫びます。しかしどんなに叫んでも答えがありません。身を傷つけながら狂ったように踊っても何も起きません。

次にエリヤの番です。薪を並べてその上に切り裂いた一頭の雄牛を載せるところまでは、バアルの預言者たちと同じです。違うのは、その上に三度水をかけさせたところです。こんなに水をかけたのでは、人の力では絶対に火はつけられない。でも、もしそれでも火がついたならば、それは主が与えたものであるとだれもが認めることになります。

## 3) あなたが翻してくださる

そのような準備ができたところでエリヤは、37節でこう祈ります。「私に答えてください。主よ、私に答えてください。そうすればこの民は、主よ、あなたこそ神であり、あなたが彼らの心を翻してくださったことを知るでしょう。」

このなかの「あなたが心を翻してくださった」というところが少々わかりにくいので説明します。先ほど述べたように、民たちはいまだどっちつかずの状態であいまいな態度をとっております。エリヤが

「どちらを選ぶのか」と問いかけても返事もしません。でも、エリヤが祈り、主の火が降り、全焼のささげ物と薪と石と土を焼き尽くすのを見た人々は39節でこうなる。「民はみな、これを見てひれ伏し、『主こそ神です。主こそ神です』と言った。」エリヤの問いかけに返事もしなかった民たちが、「主こそ神です」と叫んでいきました。「民の心を翻すようにしてくださった」というのはこのことを指しています。

#### 4) 信仰を失う者に関わる神

ところで、イスラエルの民たちは、もともとどっちつかずの信仰だったのでしょか。もちろんそんなことはない。モーセを通して律法が与えられ、律法を通してアブラハム、イサク、ヤコブの神について徹底的に教えられ、主だけを信じるように訓練されてきたはずなのです。それが今、アハブ王がバアル神を持ち込んだら、あっという間に主を捨ててどっちつかずの信仰になってしまった。人間というのはこの程度のものだということです。かけ声や努力で信仰を守り続けることはおそらくできない。神が助けてくださらなければ、信仰はどこかに吹っ飛んでいくのです。そんな私たちを神はどのように助けてくださるのか。30節で、エリヤが壊れていた主の祭壇を築き直したというところに目を留めながら考えていきます。

## 2 主の祭壇

### 1) ヤコブの場合

その「主の祭壇」とはそもそもどんなものであったのか。まずそのことを確認するために、エリヤも名前を挙げているヤコブを取り上げ、ヤコブがどのように主の祭壇に関わったのかを見ておきます。創世記35章1節から3節を開きます。「神はヤコブに仰せられた。『立って、ベテルに上り、そこに住みなさい。そしてそこに、あなたが兄エサウから逃れたとき、あなたに現れた神のために祭壇を築きなさい。』それで、ヤコブは自分の家族と、自分と一緒にいるすべての者に言った。『あなたがたの中にある異国の神々を取り除き、身をきよめ、衣を着替えなさい。私たちは立って、ベテルに上って行こう。私はそこに、苦難の日に私に答え、私が歩んだ道でともにいてくださった神に、祭壇を築こう。』」

ここでヤコブは、自分がこれから祭壇を築くのは、「苦難の日に私に答え、私が歩んだ道でともにいてくださった神」のためだと言っています。彼は、兄エサウを裏切り、人を傷つけ、自己中心の

生き方を繰り返していた人でした。若いときには気がつかなかったけれど、いろいろな苦しみを通して彼はどんなに自分が罪深いものであったのかを学んでいきます。そんな恥ずかしいような自分であっても、主はあきらめずにいつもともにいてくださった。そのことに驚きました。その恵み感謝しようと思いましたが、でもその感謝をどのように表せばよいのか迷っていたとき、神は教えます。「ベテルに上って、主のために祭壇を築きなさい。」

そこで彼は、異国の神々を取り除き、次に身をきよめて、服を着替えるよう家族や使用人たちに命じる。このヤコブの態度こそが、主の祭壇の特徴をよく表しています。二つの特徴があります。

一つ目。モーセの十戒でも言われているように、主はお一人である。主の祭壇を築くというのであれば、異国の神々があるはずがない。どちらの神でもよい、という態度はありえないわけです。エリヤは民たちに「いつまでどっちつかずの態度でいるのか」と迫ったのもこのためでした。

二つ目。身をきよめて服を着替える。なぜこんなことを言うのか。からだを洗い、きれいな服を着たところで罪が消えるわけではない。でも、主の祭壇の前に立つとき、どうしても自分の罪深さを意識せざるを得なくなる。だからからだをきよめと言うわけです。主の祭壇というのはそういう場所です。

### 2) ヤコブと格闘し、弱くなられた神

ヤコブは若いとき、自分の罪に目を向けようとせず、逃げてばかりいました。でも、波乱に満ちた人生を歩むうちに罪に向き合わざるを得なくなり、それで、自分がひどい目に遭わせた兄エサウと和解することを決心する。でも、兄と会う前の晩というときに、どうしても怖くなって逃げ出したくなる。どうしようかと悶々としていたときに、神の人が来てくださり、暗闇の中でいっしょに格闘します。ヤコブは神の人に言いました。「私を祝福してくださらなければ絶対に離さない。」そうしたら、なんと神の人はヤコブに負けてくださり、祝福を与えてくださった。それでやっとヤコブは兄エサウに会う決心をし、兄と和解していきます。

この経験を通してヤコブは、神の救いのご計画を学んでいきます。主は、私の罪を赦すために十字架で敗北する姿をとられ、いのちを捨ててくださる。それが私たちへの祝福として与えられていくことをヤコブは知り、主の祭壇を築く者へと変えられていきました。

### 3) 火で燃え尽くされる祭壇

そのヤコブから十二人の子どもたちが生まれ、やがてイスラエルの十二部族が形成されていきます。エリヤは、ヤコブを通してイスラエルの歴史に関わってくださる神を思い起こすために十二の石を取り、その石で祭壇を築き直します。その上に天からの火が降り、全焼のいけにえとともに祭壇も燃やし尽くしていきます。

祭壇が燃えていくのを見たとき、民たちは叫びます。「主こそ神です。」かつて主を捨て去り、こわれた主の祭壇を見ても見向きもしなくなった民たちが、もう一度主に立ち返りました。エリヤはこのことを先取りして、「主が彼らの心を翻してくださった」と祈りました。いったいどのようにして民たちは心を翻し、主に立ち返ることができたのか。

言うまでもなく、天から火が降り祭壇が燃えたことがきっかけです。ヤコブは語っていました。主の祭壇とは、私たちの隠れている罪を明らかにされる神の御臨在の場所である。その祭壇がいま完全に燃やされていく。ということは、これは何を表しているのか。神が犠牲を払ったということではないですか。それで民たちが主に立ち返ることができた。

「火をもって答える神、その方が神である」とエリヤは言いました。これを聞いて、私たちは「戦いに勝利する力強い神の火」と最初は思ったかもしれません。確かに肉の目にはそう見えます。でもよく考えてください。その火はどこで燃えたのですか。主の祭壇です。天から降った火によって燃やされた。このことから何を思い起こしますか。父なる神のさばきを受けてくださった救い主イエス・キリストの十字架と同じではないですか。そうすると私たちは気がつきます。主が十字架で弱くなられたのは、神を捨ててどっちつかずによるめいていた私たちをもう一度神である主に立ち返らせるためにであったことを、です。

このようにしてくださった神である方が、私たちの主となってくださったことをまた覚えて御名をあげます。